様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月３０日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２００５２
研究課題名（和文）　現代フランス思想の証言論を起点とした宗教哲学の原理的再考察
研究課題名（英文）　A fundamental Reconsideration on the Philosophy of Religion from the Doctrines of Testimony in Contemporary French Thought

研究代表者
杉村　靖彦　（SUGIMURA YASUHIKO）
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：　２０３０３７９５

研究成果の概要：リクール、ナベール、レヴィナス、デリダ、アンリ等、20 世紀中盤以降の現代フランスの哲学者たちが共通して関心を寄せる「証言」の概念に着目し、それをハイデガーが「証し」の概念に集約した思索の批判的継承という角度から連関づけることで、この概念の重要性を浮かび上がらせた。さらに、証言という術語に畳み込まれた宗教的含意に目を向けることで、彼らの証言論から現代の「宗教哲学」の可能性と問題性に関する原理的再考察への道筋をつけた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,000,000	0	1,000,000
２００７年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	600,000	3,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：　哲学（宗教学）
キーワード：宗教哲学、現代フランス思想、証言、リクール、ナベール、レヴィナス、デリダ

１．研究開始当初の背景

(1)「証言(témoignage,Zeugnis, testimony)」という術語は、20 世紀中盤以降の現代フランス思想に見られる先鋭的な諸思索において、「証言不可能性の証言」というべき屈折した仕方でもち出されてきたものである。これは、狭義の哲学的な文脈ではハイデガーの「証し」論の批判的受取り直しとして、広義の精神史的文脈では「アウシュヴィッツ以降」の現代における思索の可能性の試金石として特徴づけられる事柄である。だが、このような観点から現代フランス哲学の主要な思索を連関づけようとする試みは、P.Bouretz による現代ユダヤ思想史からのアプローチ(*Témoins du futur. Philosophie et messianisme, Paris, Gallimard*, 2003.)などの少数の例外を除いて、これまではほとんど存在していなかった。

(2)こうした証言論においては、証言という

術語が背負う宗教的含意が徹底的な否定をくぐり抜けて活用されている。そのようにして生じてくる思索は、現代における宗教哲学のあり方を考察しようとする企てにとって、多大な示唆を含むはずである。しかし、この注目すべき材料を宗教哲学の原理的な再考察に連関づけようとする試みは、J.Greischによる浩瀚な宗教哲学三部作(*Le buisson ardent et les lumières de la raison. L'invention de la philosophie de la religion*, Vol.1-3, Paris, Cerf, 2002-2004.)に散見される程度であって、世界的に見ても、研究開始当初はほとんど着手されていなかった課題であったと言える。

２．研究の目的

(1)現代哲学、とくに 20 世紀中盤以降の現代フランス哲学に見られる先鋭的な諸思索を発想源として、そこで屈折した形で現れる「証言」の概念をさまざまな角度から考究することを通して、現代における「宗教哲学」の可能性と問題性に関する原理的な再考察を試みることを目指す。

(2)このような試みの背景となったのは、「宗教哲学」なる思索を、単に 19 世紀初頭に成立した哲学の特殊部門としてでもなければ、宗教学内のいささか時代遅れと受け取られがちな観念的アプローチとしてでもなく、哲学と宗教の双方が根底から問い直されざるをえない現代においてこそ求められる思索の冒険としてあらためて提示し、実践しようという狙いであった。

(3)そうした狙いを果たす上で、リクール、ナベール、レヴィナス、デリダ、アンリ、マリオン等の現代フランスの哲学者たちが恰好の手掛かりとなる。なぜなら、彼らは哲学自身の内部で哲学の根底的問い質しを先鋭化させていく中で、従来宗教へと託されてきた信頼を根こぎにするような種々の否定的経験への感受性を極度に高めながらも、そうした経験から発して哲学を刺し抜く問いを保持し表現しようとする際に、伝統的に「宗教的」な含意を背負ってきた術語を換骨奪胎し、しばしば異様なまでに変形して使用するからである。そうして引き合いに出される術語の中で、上記の哲学者たちがそれぞれ立場の違いはあるが共通して用いているのが、まさしく「証言」という術語なのである。

３．研究の方法

(1)上記の哲学者たちがそれぞれの仕方で展開する証言概念を詳細に検討し、それらをハイデガーが「証し(Bezeugnis, attestation)」の概念に集約した思索の批判的継承という角度から連関づける。

(2)そのような作業を通して、古来哲学と宗教の双方に根本から関わってきた死の問いと悪の問いの現代的な有りようを思索するための手立てを探求する。

(3)それによって、「証言」という術語が、死や悪の問いが従来の哲学や宗教の内部に囲い込まれることを拒み、逆に哲学や宗教を根底から揺るがせることによって自らの在り処を告げる仕方それ自体を指し示すさまを浮かび上がらせる。

(4)その上で、この独特の証言概念を導きとして、彼らが使用する他の「宗教的」術語や特異な神概念に光を当てることによって、哲学と宗教が根底から問い直されざるをえないような現代の状況を起点する「宗教哲学」の原理的再考察への道筋を探る。

４．研究成果

(1)上に挙げたような現代フランスの独創的な哲学者たちの思索を、ハイデガーの「証し」概念の批判的継承という観点からたがいに突き合わせ可能にし、現代フランス哲学における「証言」の問題系の重要性を浮かび上がらせたこと。この問題系は、哲学内部の議論にとどまらず、文学、歴史学、政治学、精神分析学等、多様な分野での考察と共振しつつ追求されてきたものであり、それに関心を寄せる研究者は増えてきているが、こうした形での総合の作業はまだほとんど行われていない。その意味で、本研究は、まずは現代フランス哲学研究という文脈において独自の意義をもつものであると言える。

(2)死や悪の問いの否定性のラディカルな追求とハイデガー哲学の批判的継承という姿勢において、田辺元の思索の内に上記の哲学者たちと並べて論じうる特質を見てとったこと。それによって、現代フランス哲学の「証言」概念と京都学派の哲学の「自覚」概念の突き合わせへと考察を進めるという、思わぬ副産物がもたらされた。この方面に関しては、本研究の枠内ではまだ幾本かの力線が引か

れたに過ぎないが、論者の知るかぎりではまったく前例のない問題提起であり、今後の研究においてさらなる考察を展開していきたいと考えている。なお、成果のこの点に関わる２点の業績は、いずれも国際学会においてフランス語で発表したものであるが、日本哲学に関心と知識をもつ者のみならず、広く現代哲学の研究者たちから多大な反響があった。

(3)本研究の最終的な狙いであった、現代における宗教哲学の原理的再考察という課題については、現代フランス哲学の証言論を哲学そのものの原理的問い直しという、先鋭的ではあるが現実遊離的になりかねない問題次元にとどまるのではなく、悪の問いと死の問いという具体的であらざるをえない事柄と結びつけて考えることで、決定的な進展がなされた。そうした考察を通して、現代特有の事情を背景に、悪や死という否定的経験の極点で、哲学の問いと宗教の問いが絡み合わざるをえない必然性とその際の問題性を論じることが可能になった。こうして、宗教を哲学に吸収するのでもなければ特定の宗教的立場から哲学を語るのでもない宗教哲学の遂行の仕方が見えてきた。これは、類例のきわめて少ない、独自の意味をもつ方向性であると思われる。

(4)本研究は、パリのリクールセンター、ナベールセンターの運営委員としての研究代表者の活動と連動して、フランスを始めとする国際的な研究者のネットワークの中で進められてきた。4 編のフランス語論文、2 回のフランス語講演、1 回の英語講演など、業績の相当数が外国語によるものである。このように、現代哲学の研究にふさわしい海外発信型・双方向型の研究体制を構築することができた点も、本研究の付帯的な成果として数え挙げることができる事柄である。実際、外国人研究者や海外の大学院生からコンタクトを求めてくる件数が増加し、国際的なネットワークをさらに拡大強化することができた。日本の哲学研究が長らく圧倒的な輸入超過の状況にあったことは紛れもない事実であるが、本研究の成果は、そうした状況に転換をもたらすための第一歩となりうるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

① Yasuhiko SUGIMURA, « Du mal au pardon – derniers débats entre Ricoeur et Derrida », *Rue Descartes, Hors série : L'homme capable. Autour de Paul Ricoeur*, Collège International de Philosophie, p.131-139, 2006. （査読有）
②Yasuhiko SUGIMURA, « Hajime Tanabe, lecteur des *Deux sources* – un cas de réception du bergsonisme dans "l'Ecole de Kyôto" – », *Bulletin of Death and Life Studies Vol.4*, Global COE Program DALS, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo, 2008, p.9-19.（査読有）
③杉村靖彦　「宗教哲学へ―証言という問題系から(1)」、『哲學研究』585 号、京都哲学会、2008 年 4 月、61-85 頁。（査読有）
④杉村靖彦　「宗教哲学へ―証言という問題系から(2)」、『哲學研究』586 号、京都哲学会、2008 年 10 月、1－23 頁。（査読有）
⑤杉村靖彦　「諸判断の葛藤―記憶・証言・歴史」、『フランス哲学・思想研究』13 号、日仏哲学会、48－58 頁。（査読有）

〔学会発表〕（計 7 件）
①Yasuhiko SUGIMURA, « L' être humain comme témoin du "néant absolu " d'après la philosophie de TANABE Hajime »（2006 年 5 月 15 日、XI Collocio internationale su « filosofia et religione »： Esse umanità. L'anthoropologia nelle filosofie delle mondo (イタリア・マチェラータ大学)での講演）
②杉村靖彦　「透明化する媒介―長谷先生の思索と現代フランス哲学」（2006 年 12 月 9 日、京都宗教哲学会シンポジウム「長谷正當先生の思想」での提題）
③Yasuhiko SUGIMURA, « Hajime Tanabe, lecteur des *Deux sources* – un cas de réception du bergsonisme dans "l'Ecole de Kyôto" – »（2007 年 10 月 17 日、Au-delà de la philosophie de la vie. Les ateliers sur *Les Deux sources de la morale et de la religion* de Bergson（東京大学）での講演）
④ Yasuhiko SUGIMURA, « Selfhood, historically attested – Ricoeur's "hermeneutics of testimony"– »（2008 年 7 月 30 日、The XXII World Congress of Philosophy, invited session：Paul Ricoeur and the hermeneutics of identity（韓国・ソウル大学）での発表）

〔図書〕（計 5 件）
①Yasuhiko SUGIMURA et al. *Humaniora Kiotoensia. On the Centenary of Kyoto Humanities*, Graduate School of Letters of

Kyoto University, p.79-100, 2006.
②杉村靖彦(共著)、秋富克哉・関口浩・的場哲朗共編『ハイデッガー『存在と時間』の現在』、南窓社、2007 年、209-227 頁。
③杉村靖彦(共著)、鷲田清一編『哲学の歴史 12　実存・構造・他者　20 世紀Ⅲ』、中央公論新社、2008 年、171－191 頁、519－555 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
杉村靖彦（SUGIMURA YASUHIKO）
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20303795